

石川の巨樹 白山麓の奥深さに驚愕「這いトチ」

平成12年10月7日、雲一つない秋晴れのもと、白峰村（当時）の駐車場に石川県巨樹の会のメンバー中心に5人が集まった。ここからは車2台に分乗して出発、白峰村を抜け大杉谷林道に入った。

曲りくねった山道を1時間程度進み、林道脇に車を止め山側の斜面に取り付いて藪漕ぎしながら、案内役の地元山口氏を先頭に皆あとに続く道は当然のごとく無く、沢伝いに足元を濡らさぬ様子を付けて歩を進めた。

30分程で少し眺望の開けたなだらかな場所に出た。先頭を進む山口氏の「もう少しです」の声に引つ張られる様に、白山の伏流水の湧水で出来たと思われる小さな池塘の様な泥濘を避けながら沢を渡り進むと、漸く正面に鳴谷山を望む目的の場所に着いた。

さて「這いトチ」はと周囲を探しても見つかることは出来ず、これですと言われた1本は藪がこんもり茂った4〜5m程の樹高で、枝が皆主

幹を囲む様に下へ垂れ下がりマンモスの巨大な牙の様に見え、その何本かは斜面を這う様に下って60m以上も伸びていた。

今まで見て来たトチノキとは似て



マンモスの牙の様な枝が斜面を下る這いトチ

も似つかぬ茹蟠を逆さまにした様な形状であった。長く地を這う枝は根が露出したものでも思ったが、その太い枝からは半ば黄葉した五葉、七葉をつけた小枝を何本も伸ばしていた。

何らかの外的な力が加わり折れたのではと思い、その枝を伝って樹上まで登り主幹の状態を調べても折れた様な痕跡は見つけることは出来ず、不思議な樹形の謎の明確な答えはその時点では判明しなかった。周囲を調べると、他のトチノキやサワグルミもほぼ同様の樹形である。

改めてじっくり周りを眺めると今我々が立っている場所、即ちこのトチノキが育って来た環境は三方を尾根に囲まれ西南西に開けた谷筋のなだらかな地形であり、この様な環境での冬期間の積雪量は想像を絶することが考えられ、厳しい雪圧や強風に耐えに耐えて数百年経た姿が今あるこの異形であると結論に至った。

全国的には、松は「臥竜の松」、梅は「臥龍梅」などの名称が付くものがあり、枝が横に地を這う様に延びる樹は珍しくないが、ことトチノキでは他に類を見ない非常に珍しい

貴重な事例であると思う。付近にはクマの糞やイノシシの足跡等々が散見され、白山麓の奥深く入り込んでいる事を実感すると共に、広大な白山麓にはまだまだ多くの巨樹が数百年の齢を重ねひっそりと我々を待っている様に思う。

また、途中アサギマダラの姿を何度も見かけ、巨樹はもとより様々な生物、自然の宝庫である白山麓の奥深さの一端に触れた貴重な一日であった。

この時から13年後に再び訪ねる機会があったが、変わらず異形で佇む這いトチを確認出来た。



這いトチの前で (H25.9.21撮影)

○這いトチ (白山市白峰)

樹高：4m、幹周：4m、管理者：石川森林管理署、所在地：釈迦ヶ岳国有林 (大杉谷林道)

(石川県巨樹の会 北川正司)